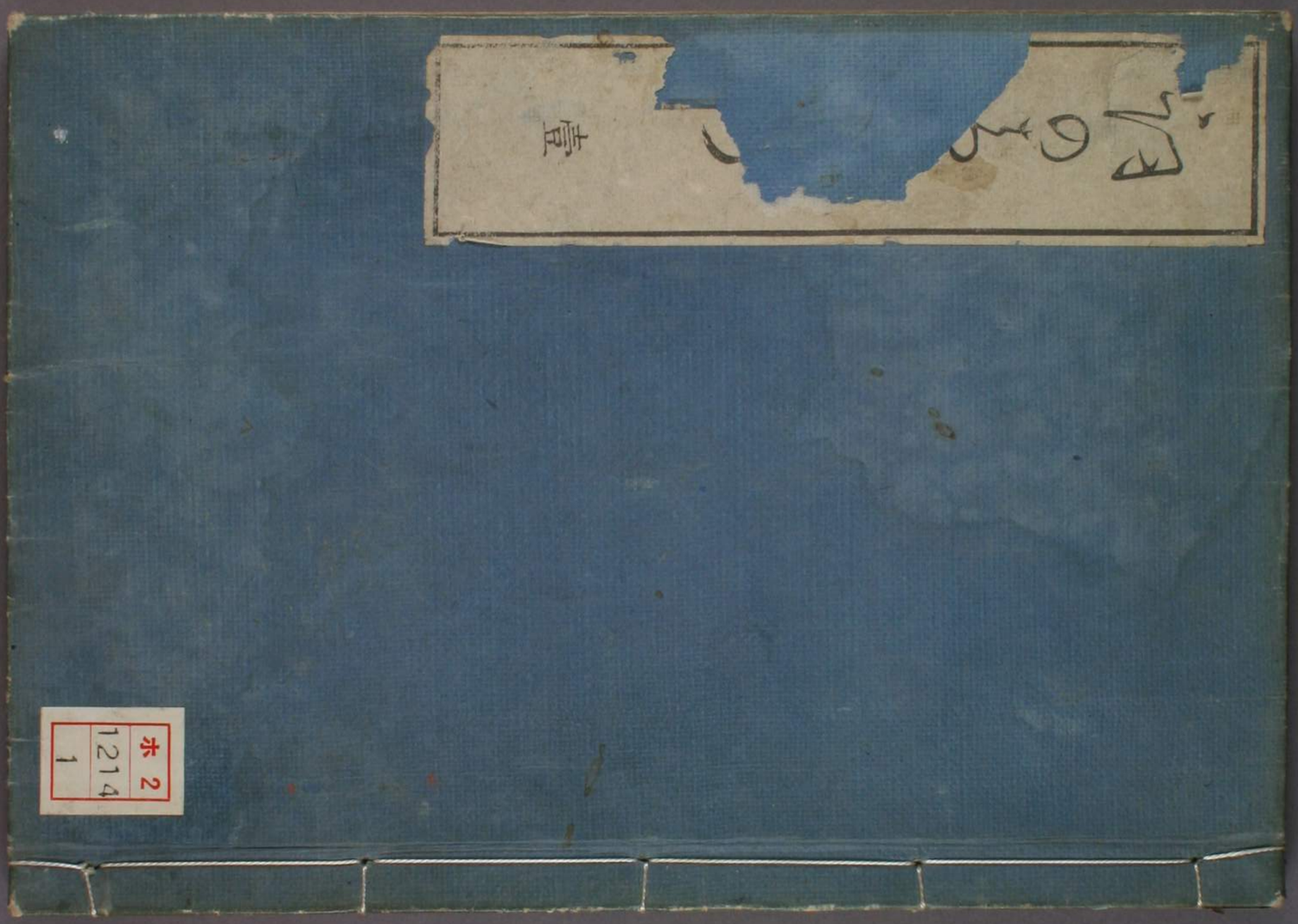

ホ 2
1214
1

酒井氏

門 特2
號 1214
卷 1-5

宮内省圖書寮

岩波氏記

酒井氏記

詞捷徑上巻

源重胤著
源春夫校

大旨

漢字三音考よいくく。皇大御國ハ。天地ノ間ニアラユル萬國ヲ御照シ坐マス。天照大御神ノ御生坐ル本ツ御國ニシテ。即其御後ノ皇統。天地ト共ニ動キナク無窮ニ傳ハリ坐テ。千萬御代マデ天下ヲ統御ス御國ナレバ。懸マクモ可畏天皇ノ尊ク坐マスコト。天地ノ間ニ二ツナクシテ。萬國ノ大君ニ坐マセバ。異國國ノ王等ハ。悉ク臣ト稱ジテ。吾御國ニ服事ルベキ理リ著明シ。中畧サテ如此尊ク萬國ニ上タル御國ナルガ故ニ。

方位モ萬國ノ初ニ居テ。人身ノ元首ノ如ク。萬ノ物ノ事モ。皆勝レテ美キ中ニ。殊ニ人ノ聲音言語ノ正シク美タキコト。亦愛ニ萬國ニ優テ。其音清朗ト清クアザヤカニシテ。譬ヘバイトヨク晴タル天ヲ日中ニ仰ギ瞻ルガ如ク。イサヽカモ曇リ無ク。又單直ニシテ迂曲シル事無クシテ。同書ハ。凡テ朦朧ト渾濁リテ。譬ヘバ曇リ日ノタ暮ノ天ヲ瞻ルガ如シ」と有るハ對へられて。眞ニ天地間ノ純粹正雅ノ音ナリ」といされて。此ハ古語ハ。言靈能佐吉播布國。まさ事靈之所佐國。この二つは言の心ハ。皇大御國は言語ハ。實ハ天地開け純粹正雅の音ヨて。言ごとハ無盡の意と含畜せるふるゞ。其用法ハれのづからいと嚴そうふろ定格有て。称呼とふてい用さてい進退作用の言とふて。或ハその形狀とかさる言とふて。そもこ彼我反對の條理にて。まさ係辭とふてい連れたる意味の淺深とわろち。助辭とふてい言外れこころ用ひと知らしめ。或ハ禁止の辭とふて。指揮の辭とふて。結辭とふてい上よて言ひ下れ叉の意と別ちて。疑。治。定。過去。現在。未來とをきためるどゞとも奇〻妙ふるよしとかさる古語ふて。心とつけてといつる言はこころと熟く得られさる思辨ふべくふむ。

説ヨて甚も尊くふむ有ける。然ども言靈は妙用世ヨかくもてふむ有けると。本居大人は如此く見顯ハし出給て

かく言舉せちもたるふむ。千萬年は前ハも後ハも比類罕ふる功績ヨハ有ける。

音考。字音假字用格。詞の玉は緒ふどゝ書は中ヨそれこゝろ用せられさる事ゞ色とゝて。何くもは書はてハ鈴木朗ゞ言語四種論いとよたもも知ふる事ふてつゝ。後鈴屋翁の詞八衢。詞通路ふどゞ目さむるゞうをめてさし。ふミもてける。此書世ヨいでゝよて天下ふやうゝ活言のさふ心と用ふる輩ふんいと多く出來ヨさめるゞいともいゞ方ヨ心と用ふる輩ふんいと多く出來ヨさめるゞいともいゞどきいさをふてけて。まさかざゝ抄にもひ抄も。此ヨふらべ

て必見るべき書かゞ。然るに善事は惡事い繼ぐ世は理いすべもなきかも。此大人の精說と竊〳〵ふぐら。聊は過と見出てい。我たけく得たゞげに。此よゞ彼よゞ何くまは書どもと著し出て煩ハ〳〵きまで多らるハ。此豆爾袁波はふゝどもゝて其弊ゝよゞて今ハ事實と徵〳〵明らむる學問い傍は物となりて豆爾袁波はすぢゝのゝかゞつらひて。生涯は力と用ふる人ぞ多りめる。いろふロを〳〵き事も〳〵ずやこゝまゝよゞて此捷徑いつくれるなり。此書ものゞ家說と立ゞ。言語は條理ゝつけて見得る事等と輯ゑ。それゝ今按とも記し添て。初山蹈のゝを りゝとて。物〳〵るゝゞ。

音韻

同書ふいとく「サテ其古言は正音ハタゞ四十七ニシテ。ヤノ行ノイエトヲノ行ノウヲ加フレバ。都テ五十ナリ。此イエウノ三音ノ各ニツアル「所以アリ。ニツカト思ヘバ一ツ。一ツカト思ヘバニツニシテ。一ツトモニツトモ云ガタシ。此妙處ハアヤワ三行ノ音ノ分レタルユエヲヨク了解セバ。オノヅカラ明ラカナルベシ。是ニカノ行サノ行タノ行ハノ行ノ濁音合セテ二十ヲ加フレバ都テ七十ナレドモ。濁音ハタゞ清音ノ變ニシテ。モトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇國ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立ズ。清音ニ攝スルモノナリ。一音ノ言ニ濁ル例ナク。又二音三音ヲ合セタル言ニモ首ヲ濁ル例ナシ。凡テ濁ハタゞ其中下ニノミアリ。然ルニ上ヘ佗ノ言ヲ連ネテ合セイフトキハ首ヲモ濁ル事多シ。月ヲモ望月ナドト云トキハ。ツヲ濁リ。川ヲモ谷川ナドゝ云トキハカヲ濁ル

ガ如シ。此例ヲ以テ見レバ。一言ノウチノ中下ニ濁アルモノモ。其本ハ二言ノ連合セルモノナラムカ。其意得ヤスキモノヲ一ツニツ例ニイハゞ。祖父祖母ハ大父大母ノ義。柳ハ箭之木。窓ハ間戸。袖ハ衣手。筆ハ文手。札ハ文板ニテ。皆二言ノ一言ニナレルニテ。濁音ハ何レモ連聲ノ便ナリ。然レバ此餘ノ。義ノ知ガタキ濁音モ皆此類ナルベキカ。○また古史徴ニ。古語ニ濁音の希少なる由ハ。まづ今ハ誰も濁音と思ひ定めたる語ニも。もとハ清音なる語多うて。其ハ始繼水ふどのシキツハ古書ふも多く濁音の假字と書き。今も大うさ仕人ハ濁アて転ぬもとめもど。語の原と思ヘバ。始ハ端。繼ハ付。水ハ滿と通ぬもバ。原ハ共ニ清音ニて濁るハ中ニ後なア。此ハ此一ツニツニ限らバ。長ハ中。正ハ立。氏ハ内なる類ひ。凡て濁音ニいふ萬語の解ゲさ如ハ清音ニかへて考ふもバ。十ニ六ツ七ツハ速ニ解えらること。前ニふと悟アて得て。人ニも彼此語アて驗ミめたる小誰も實然ことなるなアと云へア。といそれさるなんげふさる事ニて。古言と解くものゝ規則とすべき至言なる。サテ其五十ノ音ハ。縦ニ五ツ横ニ二十ヅゝ相連リテ。各縦横音韻調ヒテ亂ルゝコトナク。其音清朗ナルガ故ニ。イサミカモ相

涉リ紛ラハシキ事モナク。○縦横トハアカサタナハマヤラワノ列ヒいへア。所謂五十連音韻圖ハ。いつれ世ニ誰ゲつくアしといふ事。古書ニ所見なし。鈴屋翁ハ説ニ此ハ。悉曇字母ニ依アて其學ハ爲ニつくるもハ非バ。また皇國ハ語音ハ爲ニつくるもハ。して。皇國ハ固有ニ。また皇國ハ五十なゞら。原よア皇國の正音ニしゝさらニ彼國をうつし取るふらバ。ろい古言と以て知べきなア。といそれ。されど重亂ゲ心ハ然らバ。悉曇字母ニ似れるハ我よア彼をうつしたるニ非バ。もとよアア皇國ハもハ似なるなア。これ故ニ印度ハ音韻。此五十連音ニ彼よア我ニ似なるなア。これ故ニ印度ハ音韻。此五十連音ニて更行ぬも都ど皇國ハ言語ハさめニハ。此ニて有餘不足なきニても。固有なる事著くなんいアけるなり。如此く天地間の正音なるよアア。太古よアア誰ゲ言ふともなく自然ニ傳ハアたるなるゲ。文字と以て事を記ハ世ともなアてハ後ニ。次第て見きバ。これ五十連音韻圖とハなアさるなア。其證ハ一言のうへニ用さとなれニアイウエオ。カキクケコなどハ順ニ依らざきバ。ろハ用とこれからぬニても知べし。さるうニ後世ニ梵文ハわさる時節とまちて。天下ハ言語の更ニ轉倒き出ん

もはとしハ。ふつゝ一一ノ音ニ平上去ノ三聲ヲ具シテ。言ニ思ひよらずゐん。

隨テ轉用スル○重胤云皇國は語言ハ。たゞ平上去の三ツのミにアて入聲ハおし。やうゝ漢梵蘭は學ばアて後ふ。俤離缺古は音聲言語と見おき聞おきて其方ざまのこゝろとゞひハ爲れども。此方はことばゴハ同書ニ先皇國ノ言語ノ法連用ノ便ニ隨テ。同言モ三聲平上去轉變スルコトニテ。其轉變ニ依テ義ノ種々ニ分ルゝコトアリ。日ハ平聲。樋ハ上聲。火ハ去聲ナルヲ。日影ト云トキノ日ハ上聲。掛樋ト云トキノ樋ハ去聲。火箸ト云トキノ火ハ上聲トナリ。山ハ平聲ナルヲ。山風山松ナドゝ云トキハ去聲トナリ。東山西山ト云トキハ上聲ニナリ。宇治ハ去聲ナルヲ。宇治川トイヘバ上聲。宇治橋トイヘバ平聲ニナル如ク。何レノ言モ皆其聲轉スルヲ。若本音ノマゝニ呼ブトキハ。其義異ナリ。カノ山風山松ノ如キ山ヲ本音ノマゝニ平聲ニ呼べバ。山ト風ト二ツノコトニナリ。山ト松ト二ツノコトニナルヲ。轉ジテ去聲ニ呼ブニヨリテ。山ノ風山ノ松ノコトニナルガゴトシ。サテ山ハヤトマトノ二音。川ハカトハトノ二音ニテ。

コレヲ一音ヅゝ分テ各四聲ヲ云トキハ。ヤハ上聲マハ平聲。カハ上聲ハハ平聲ナリ。然レドモ又ヤマトモカハトモ連リタル言ノウヘニ平上去アリテ。山モ川モ平聲ナリ。東南ナト三音四音連リタル言モ。皆同ジコトナリ。然ルヲソノ連ナリタル音ヲ。一ゝ分テ平上去ヲ定メムトスルトキハ。紛ラハシクシテ分明ナラズ。是一言ノ内ノ音ハ。親シク連接タルガユヱナリ。サレバコレヲツラネテ。一言ノウヘニテ定ムルトキハ。三聲分明ナリ。又五十ニシテ足ザル音モナク餘シル音モナキユヱニ。一ツモ除クコト能ハズ。亦一ツモ添ルコトアタハズ。凡ソ人ノ正音ハ此ニ全備セリ。つゞは文ヨ。サレバ此五十ノ外ハ。ミナ鳥獸萬物ノ聲ニ近キモノニシテ。溷雜不正ノ音ナリト知ベシと相對へていとれさヲ。

といヲ。さて其正音は全備せるもは。詞の正ゝちヨ依るゆ。いく文を約めて出せヲ。世は音韻家たちうの悉曇。まさ韻鏡。鵝珀設ヨよヲていふ說どもハ甚うけゲさかヲぴとヲ此とき。ごとういいえさるとおゆ由もべいぎせヲ。古今萬國をいとび音韻はもとハハヒ

フヘホむる。其證ハ口を開き喉よりて眞すぐゝ息と出せバ輕
くハ――――と鳴る。息のおのづから口中へはゝ
ふくみひゞく聲むる。又唇と開き寛
げ齒と合せて息と出せバ自然かろくヒ――――と鳴る。息の齒ゝ
ふき口中へひゞくこゑむる。ろをゝ反して唇と合せ窄め齒と開きて息と
出せバ輕くフ――――と鳴る。息はおのづから唇へふきひゞくこゑむる。又さらゝ
舌と下腭へおしつけしひて息といきせばおはづから輕く
へ――――と鳴る。息の内腭より下腭へ觸れひゞくこゑむる。こゝゝ反して口びる
と窄め口中をふくらめて上腭へむけて息と出せバおのづ
から輕くホ――――と鳴る。息の上腭へふき口中へひゞくこゑむる。是と音ゝむ
かしてたしゝうゝ言へバ。喉音はハヒフヘホむる。又今すこし

たしゝうゝいへバ。半喉半唇はハヒフヘホむる。此音と長くハ
ヒーフーヘーホーと呼べバゝうは韻よりアイウエオと出れ。これ
音ゝ ○字音假名用格又或説ゝ依。イと重孫うけてアイウエオと呼べバヤ
レユヒヨとむる。ウと重孫うけてアイウエオと呼べバワ井
ゐエヱとむる。まゝエとかさ孫うけてアイウエオと呼べバ
ヤレユヒヨとむる。オと重孫うけてアイウエオと呼べバア
イウエオゝ帰るなる。○字音假字用格ゝ「喉」音三行ハわいう
一ツナリ。サテ一ツニシテ三ツニ分レタル所以ハ。わいうえれノ
五ツノ音ヲ重ヌレバ。自然トづマリテやいゆえよわゐゑを
をノ音トナルユヱニ別ニ此二行ハアルナリ。故ニ古言ノ中
ニあいうえれノ音ノ重ナリタル言ハ一ツモアルコトナシ
と見えさるまさ「喉」音ニノミ此差別アリテ。餘ノかさたなは
まらノ七行ニハ是無キハイカニトイフニ。マづや行わ行ノ

音ハモト二音ヅヽカサナリタルモノナレバ。實ハイハユル拗音ナリ。然レドモ喉音ハ餘音ニ類セズ。柔輭隱微ナルユエニ音ヅヽ重ナレドモ。オノヅカラツヾマリテ直音ノ如クナルユエニ。此ニ行ノ音トナルナリ。餘ノ七行ハ二音ヲ重ヌルトキハ。サダカニ拗音ニシテ一音ニツヾマルコトナシ。故ニ喉音ノ外ハミナ單行ナルナリ」とも見えさア合せ考べーこれヽ依アて思へべ。ハヒフヘホハアイウエオヽ引出ス爲み導音ヽて。アイウエオハ諸音ヽすぶる統韻ふア。ヤレユヒヨワ井ヲエヲハ變化ヽふすためれ重音ヽずいアける。○字音假名用格ヽ韻學家ニ喉音ヲ論ゼルコトアレドモ。皆古言ニ昧クシテ。三行ノ最然トシテ。相混ズマジキ義ヲ知ラザルユエニ。皆混雜シテ。や行わ行ハ畢竟無用ノ長物ノ如シ。といそれさる然る事ふア。ついてヽいふ「ヤレユヒヨハ舌頭ヽていふべ〜〜。ワ井ヲエヲハ唇ヽ合せていふべ」と詞れ正ミちヽ〜るせア隨ふべ〜。さてロヽ箝ミ內腭よア鼻へかけて息ヽ出せバ。おのづからク。と鳴る。このクンとワ

井ヲエヲハ重孫ろけて。クワ井ウエヲと呼べバおのづからカキクケコとなこも。これハ不熟音ふア圓熟〜て正音ハカキクケコとふる。クハい下腭ヽとうさん爲ヽ。まづ鼻ヽアア歸入する音ふア。これ鼻ヽ通ちとうて下腭ヽいさるふア。唇ヽ齒ヽと合せて。すこ〜閉ぢて息ヽ出せバ。ス——〜と鳴る。これスヽ——〜と。ワ井ヲエヲヽ重孫ろけて。スワ井ウエヲと呼べバ。おれづからサシスセソとなこも。こきハ不熟音ふア。圓熟〜て正音のサシスセソとふる。舌頭ヽて上齦ヽうち急ヽ音ヽ出せバ。テッと鳴るこれテッとヤレユヒヨヽかさ孫ろけて。ヤレユヒヨと呼べバおのづからタチツテトとこも。此ハ不熟音ふア。圓熟〜て正音のタチツテトとふる。古来

タチツテトを舌音といへるハ由なし。諸音舌を以てあやどらざるハなし。さをバ舌音と云へバ諸音ミな舌音なり。その觸るゝところを以て名目をたつべし。口をつぐミ上齶へかろく鼻へかけて息を出せバおのづからヌと鳴る。これヌをワ井うヱヲに重ねてヌワヌ井ヌうヌヱヌヲと呼べバおのづからナニヌネノときこゆ。ときハ不熟音なり。圓熟して正音のナニヌネノとなるときハ帶鼻音なり。鼻をつよくはまミてナニヌネノと呼べバタチツテトとなる。これによりてナニヌネノハ帶鼻音なることを知る。口をつぐミ唇をとぢれ鼻へ息をはなちて音を出せバムーと鳴る。これムーをワ井うヱヲに重ね掛けてムワムヰムウムヱムヲと呼べバおのづからマミムメモとなる。是も帶鼻音なり。鼻をつよくはまミてマミムメモと呼べバおのづからバビブベボになる。これによりてマミムメモハ帶鼻音なる

ことゝしる。○重胤云同書に「五十連音韻圖れぞの排列ハ悉曇章によられるもれながら、アイウエオれ順ハよろし。アカサタナハマヤラワれ順ハいさゝか違へりと見ゆるに依る。今はられめてアカサタワハマナラヤとす」。されどそれ精考を知らざれバ、容易くはられたがさかなり。こもふより此書に引用ふる件く本書れ次第とい異なり。見む人はやしむ事なかれ。舌頭にて上腭をうち急に息を出せバレッと鳴る。これレをヤレユ𛀁ヨにかさね掛て、レヤレレレユレ𛀁レヨと呼べバおのづからラリルレロときこゆ。これハ不熟音なり。圓熟して正音のラリルレロとなるといふそれさなり。よくくつぎに記せる五十連音韻圖に合せ見て悟るべし。さて圖の上層にかゝげたるハ右にいへる音韻の所生なり。下層にあらせるハ其行の音韻のこゝろなり。さて阿行の下に廣厚といへるハそのれ行の言ひ

ろくおほきなる意なきゆゑ。加行の下ゝ堅牢(ケンラウ)と志るせるハ。ろれ行の言かさき意なもバなり。佐行の下ゝ窄小(サクセウ)と志る

五十連音韻圖

統韻	喉音 舌本	下腭 齦音	下齦 齒音	上齦 彈音	帶鼻 上齦
	ア	カ(ガ)	サ(ザ)	タ(ダ)	ナ
	イ	キ(ギ)	シ(ジ)	チ(ヂ)	ニ
	ウ	ク(グ)	ス(ズ)	ツ(ヅ)	ヌ
	エ	ケ(ゲ)	セ(ゼ)	テ(デ)	ネ
	オ	コ(ゴ)	ソ(ゾ)	ト(ド)	ノ
	廣厚	堅牢	窄小	剛直	和順

導音	半喉 半唇	帶鼻 唇音	喉音 舌頭	上腭 彈音	微彈 唇音	所言 生齶
	ハ(バ)	マ	ヤ	ラ	ワ	喉
	ヒ(ビ)	ミ	レ	リ	井	齒
	フ(ブ)	ム	ユ	ル	ウ	唇
	ヘ(ベ)	メ	ル	レ	エ	下腭
	ホ(ボ)	モ	ヨ	ロ	ヲ	上腭
	變更	渾融	進前	形狀	採曲	大言 魏意

せるハ。其行の言せバくちひさなる意なもバなり。多行の下ゝ剛直(カウチヨク)と志るせるハ。其行の言剛(ツヨ)くつよなる意なもバなり。奈行

は下ニ和順と志るせるハ。其行は言柔くやいらゝかる意か
もべかる。波行の下ニ變更と志るせるハ。其行の言變更る
意かもべなり。麻行の下ニ渾融と志るせるハ。其行の言物と
すべ圓むる意かれバなり。夜行の下ニ進前と志るせるハ。其
行の言すゝゆくこゝろかもべなり。良行は下ニ形狀と志
るせるハ。此行ハ諸は言の下ニゐひて。其こゝろ有入居かど
はだとく體用は言の形狀を表し意を達す言在バなり。和行
の下ニ樣曲と志るせるハ。其行の言かよゝろかる意ゐれバ
なり。これらはおもぶきとよく明らめかバ。自然音韻は靈妙
ふむいちじるくもちらるゝものかる。

體言

詞ハ衢といふうまし書世ニ出しより。ゐは恩頼と蒙ふて。
用言は方ニハふうく心と用ひて。どかう云めきどこは體言
はゝハおのづゐらかる物ふして。ゐは定格ゐる事ニ心づけ
るさまふも見えざるなり。余と〜ごろ此事と。ゐらバ口をし〜
かもひつさるふつけて。語彙といふ書と著述して。流布さど
や心ゐもとども。ゐハ天下は言語とことぐく彙むるとざか
もべ。とゝふ竟べくもゐらばかんゐる。此語彙ハ鈴屋翁の玉
意と得て古史徵ニ古今の言語を鬱めんとゐは下かもへさる
へゐなつるニ。いとも止事もき大業はおそれニより。得物し
散すと云れさるニ依りて重亂おもひれはして志るしそめ
つるかなり。其書の大旨ハ體言用言はかぎりを五十連音の次

第ゝいげ。其徴と詳ゝ〳〵其義と釋せきばいとも〳〵容易おら
ぬわざおるゝよゝ。うき出来るまでゝハこゝられ年とやへ
ぬらむう〳〵。いうで力と戮せてこ
れわざと相たすけおれ人もがお。此ついでゝいさゝうれ
定格といとんゝ。體言といふもれ種〻小別きて。一ゝい有形
體言。二ゝハ無形體言。三ゝハ用語體言。四ゝハ用略體言。五ゝ
ハ二合體言三合四合も此例也。おどすべて五種おゝ。うハさ〳〵も要お
さお似さもどもこれ差別と熟く知らでハ。ことぞとえゝわ
くることと難く又條理無けきバ。いさゝうおどろうすお
ゝ。○有形體言とハあめ天。つち地。ひ日。つき月。やま山。かハ川。くさ草。き木。おと
だとくかさちうる稱呼おゝ。○無形體言とハこゝつさひと
さとるおつうさふゆおど。春夏秋冬形カタチおさものゝ名目おゝ。○用語體

言とハ。うさひ。波行四段用言。宿やどゝ。良行四段用言。たぎち。瀧多行四段用言。くもゝ。曇良行四
用言。おどれだとく。用言れ第二段おる。續用言といひすゑて
うれと物の名とハおしたるおゝ。○用略體言とハ。うさ歌波行四段
用言。宿やど良行四段用言。瀧たぎ多行四段用言。雲くも良行四段用言。おどれ如く。用言れ第
二段おる。續用言れとぶうゝて一ッれ言とおきるおゝ。○二合
體言とハ。體言と二つ合せたるゝて。譬へバ天と地とと二つ
合せてうめつちといひ。日と月とと二ッ合せてひつきといい
ひ。山と川とと二つ合せてやまがとといひ。草と木と二つ合
せてくさきといふが如し。まさ同例ゝて。つゝふ釣船糸。ひがさ。え于浮得
もれ。ゝゝさ。おどれごとく用語體言と上ゝおきて。佗の體言

と下ゑつら孫合せたるゐあ。こまらつる船ひる瀉うる物す
つゞけて用をふれとい別ゑて一度續用言を言ひすゑて。體
言とふしさるを。他の體言ゑ言ひ上ゑ置ゑて類ひ多らるもゑ
の中ゑあ。てわうちてことゑ其物とさしていふと又ゑれ
ゑ。體言と二つ合せさるゑて。上ふゑと同例ふあ。
ふ反して。やまず。住 まとゐ。圓居 かさこひ。冬 ふゆがま。枯 ふどゑ類ひ。他
ゑ體言ゑ下ゑ。用語體言をつら孫合せたるゐあ。これも上の
用をふすとい異ゑて。うゑ體と ごとくその
かさる詞ふもゞ等しきふあ。まさうさうら。歌占笑窪 ゑくぼふどゑ
如く。用略體言ゑ二つ合ひて言とふきるゐあ。いづきも下ふ
る言をむ孫とする時のことゑて。中間ふのもゞを置てつゞ
けたると同ゞ。餘い准ら〳〵知るべし。三合四合もふさてかく
連孫合せさる言を合語ともいゑあ。こまふ六の格ふむゐる。

うゑ一ゑハ第四音を第一音ゑ轉ゞて。加行 さけ酒槽 とさうぶ酒槽 ふ。
佐風行 かぜ風 早とかざ風早 や。多手行 て枕手枕 をたまくら。奈稲行 いね稲田 をいなだ。
波苗行 なへ苗代 をなはしろ代。麻目行 め輪目 をまぶち。夜行 ひえ夜冷風 をひやかぜ冷風
良枯行 かれ枯 ゑからゑ。和聲行 こゑ聲 大をこわだ大聲 ふあど。加佐多奈波
麻夜良和ゑ九行ともゑゐあて此例いと多らあ。但阿行のミ
さるハ阿行の音いづきゑ言ゑ下ゑもつらぬ音ふきバな ハ此例ふし
あ五十連音ゑ中ゑ。阿行ゑ音の下ゑ附らざると。良行の音ゑ
上ゑ居らざると。いづこもうゑでうなり。其二ゑハ第二音と第三音ふうつして。
加月行 つき夜とつくよ月夜。瓊 に矛とぬほこ瓊矛。麻神行 かみ神風とかむかぜ神風ふあど
いふたぐひあ。此例ふか らるべし。其三ゑハ第二音と第四音ふうつ
して。多カ行 たち帯カ をたてハきふ帯カ どいへるゐあ。此例ふか らるべし。其四ゑ

ハ第二音と第五音ふうつゝて。加行きは間をこはま。木間奈行に前と荷のさは。波行ひ串をかぐし。火串夜行おい繋をおよかけおどい老いるう老繋行を。此例おか白いるべし。其六ヨハ第五音と第一音ふうつゝて。良行志ろ山白とちらやまおどい老いるう老繋行を。此例ふか白いるべし。かくは如く定まる格ゐを。ろは連をつゞく所はさまふ依を。然うつろハでハえゐらぬわざおるハ。如何といふヨ通略延約辨ヨ。「かくは だとく音と轉じて合するハ。下は詞の意おもく。上は詞の意 かろき時は事おを」といそれたるヨてよく通えたをすべて は言語かくはだとく規則をたてゝ足をバ。其條理をハやう まをえわうゐゝもはおを。

用言

用言とハ上おる體言ふ對へていふ名ふを。轉ををさらくふ よを て活言ともいふふを。本居春庭翁の説ヨ。「詞の用ハいろ ふとも言ひ知らぬ。ともゝ奇しく妙ふるものふして。一 つ詞もその用法ふよを て事かハを。たらさふ隨ひつゝ意 も異ヨ聞えふどゝして千くは事を言ひ分ち萬のさまを語を 別つヨ。いさゝゝも紛るゝ事ふく。又見る物きく物。人の心ヨ おゝこめさる思ひの隈く。すべて世中ヨゐをとゝ有ることと いく千萬の事ふをとも。言盡ゝま泳びやらむヨ。足ハぬ事ふ くゐゐぬ事ふさい。此をさらさふ依るヨさふふむ有をける。

さゐい神代よりて。自然定格ありて。今世かいさるまで轉て變る事ふく。少し違い誤るときい。その事さらば。其意通え難き物かし有バ。一字と雖も猥りかそぶら猥りる加へかど。すべて大凡まかすべきものまい非ば」といもさて。かもその詞八衢を本かしてかは佗人くれ考得さる事どもとことぶとくかし取纂めこもと校合せこもと訂正して此圖ハ製作もて。さてその用言一云活言れ大綱すべて六種ありて。いそゆる四段活言。一段活言。中二段活言下二段活言。變格活言。形狀活言。かど名目せる此かて。詞八衢かし「きられ名もとよりるは非ざもとも。事と別ち言ハむる。名目かくていい便用らしけを

バ今かてかつけさるなり。下すべて此名もていへて」とゐるよよりてもろくれ名目ハその書ゝとりてかはかのかこゝろと定めれるも多うて。其條〻かし言ふと見て知るべし。

○詞八衢ゝ云く。「四段活とハかきくけさしすせとやうかし。第一音よりて四音までつぎ〻〻四段かしからかんあきらくわけれさんかしもすかせかど活くといふかて。此活言かぞりかくいと多し」。

○同書ゝ云く。「一段活とハきるれかるれかるかど。第二音一段のみまて活くといふきるれるれるきのるまい言とろ〻〻活用とかせるまて。其行の音ゝいかゝいらざるか

ア。さて此活すべて一音ヨてきにふどいふよヲ外ふけきバ。此活言いとすくふ〜。」意取

○同書ホ云「中二段活といさくくるくき。ちつけるつきと第二音三音ヨて。れきおくれくるおくきもちれつおつるれつきふど活くといふふア。くるくきつるつきふどれるきい。一段活のところヨいへるガ如〜。此活言も多からず」意取

○同書ヨ云く。下二段活とハ。えううるうきけくくるくきと。第三音と四音との二段ヨて。えううるうきけくくるくれふどくとらくといへア。うるうれくるくれのるきい一段活の下ヨ云るガ如〜。此活言のをていと多〜」意取

○變格活言といハ上ふる四種活言とハ。大同小異ヨていづきれ活言ホも屬ぬ一種ハるとア。かアホ變格とハ名づけさるふア。加行ヨこきくくるくれ。中二段活言ホ大同〜て。將然言とてといふのミ小異ふア。佐行ホせ〜すするすれ。下二段活言ホ大同〜て。續用言としといふのミ小異ふア。奈行ヨふにぬぬるぬれ。四段活言と下二段活言と。あい四段活言と大同ぢくして。有居の二言のミ。斷落言とりといふのミ小異ふア。良行ホちりるきい。さう變ふア。

○形狀活言とハ。上ふる五種活言ハことごく。進退作用の言ふるホ對てくしきけれしくしきけきけくけけきけ〜きと。凡て物の形狀といへる言ふるふよアア名づけさア。さてそのくしきけきの行とかアヨ久活言といひ。〜くしホ

きしけれの行をかはにしく活言といひ。けくけしけきけれの行をかはに祁久活言といへり。然れども本義といへば。形状(アリカタ)をさす言なるを以て形状活言と号(ナヅ)けて。此一統(ヒトムレ)の活言の名目とせるなり。

○上の六種活言のくだり〳〵と。五段に分ちて。第一段を将(シヤウ)然(ゼン)言(ゲン)といひ。第二段を續用言(ゾクヨウゲン)といひ。第三段を絶定言(ゼツテイゲン)といひ。第四段を續體言(ゾクタイゲン)といひ。第五段を既然言(キゼンゲン)といへり。

○将然言といふ。この段の言。将(マサ)に然(シカ)らんとする意にて既然言にあひむかひたる言なり。されどその差別(ケヂメ)をいはゞ。たとへば同じと受る辞(コトバ)にても。将然言と既然言によりてそのうくる意(ココロ)かはりて。こゝよりはなれさぞとうくれば。なりゆきとまへよりはねがふ意になると。既然言よりはうけば。おせぞとうくれば。後よりはまへへなりゆきといふ事になりて。大にけぢめある事唱へみてこそさとるべきなり。漢字三音考に「第一音ハ未然ラザルニ用」とあるをもてしるらば。

○續用言とハ。漢字三音考に「第二音ハ方(マサ)ニ然(シカ)ルヲ下ヘイヒオクルニ用」とあるによりてなづけたれば。ある人ハ連用言といへり。續と字義(ジギ)またく同じく用ひ來りたれど。其つゞけざまことには連よりは續のかたらなへるやうにおぼゆれば。今はおのがこゝろと思定めて。續用言となづけれるなり。さて

續用言とい。此段の言と唱へ試るか。何やらいひさしたる如きこゝちもするかよりて。下ゟ用言とそふもバ。その事達る。ふりいさゝゝ事ゟついでゟ。續用言。絶定言。續體言のけぢめといもゞ。たとへバ同〻下二段活のゟがるといふ言も。拾遺ゟ「音ゟ〻の川とゞつひゟふがれいづる。言ハでものおもふ人のゟゝどゞ」。こもハこゝけ續用言ゟ用ひさるゟて。ゟ古今ゟ「立田川もゝち葉ゟゞる。神ゟびの御室ゟ山ゟ〻ぐもふるらし〻」。とゐるハ絶定言ゟ用ひてきることバゟて。ゟ後撰ゟ。「もゝぢ葉のゟゞる〻秋ハ川ごとゟ。錦洗ふと人やゝるらん」。とゐるハ。續體言ゟ用ひさるゟて。秋といふ體言へ續けたるゟごとくい〻千萬の言語ゟても。此格ゟもる〻事ゟし。ゟゟ此言をいひすゝれゞ體言とゟるゟて。上ゟる體言の條ゟ用語體言ゟゟ用略體言ゟどいへるハ則これゟて。

○絶定言とハ。漢字三音考ゟ。第三音ハ方ニ然ルヲイシサダムルニ用」とあて門人某ゟ說ゟ絶ハ截斷の義ゟて。定ハ字書ゟ安也決也又止也とゝえ。周礼ゟ奠定の字ゟて。註ゟ定猶熟也熟即止故以定言之とゐるゟど。彼此考合せて然名づけたるゟ隨へて。さて此段を何ゟゝゟ絶定言といふぞとゟもゞたとへバのどけき春あつき夏すゞしき秋さむき冬とハつゞけども。のどけ〻春あつ〻夏すゞし〻秋さむ〻冬とハ續

うず。詞もさいいそもびれのづからきゝ〜ふよアてふア。な
ほ續體言の下ゟ見合せてさとるべし。
○續體言とハ。いひふぐしゟ下へつゞきて。ことぞけ趣意そ
こゟて落著せぬふア。たとへバ春ハのどけし夏ハあつし秋
ハすゞし冬ハさむしといへバ。絶定言とふアて。詞も趣意も
落著すると。春ハみどけき夏ハいつき秋ハすゞしき冬ハさ
むきといへバ。詞も趣意も落著せど。打きゝたるまゝふてい
落著せしやうふきど。どこやらふ心ずゝけせぬやうゟおぼ
ゆるふア。そハ何ゆゑゟさやうふるふちと。尋(タヅネ)もとむきバ。こ
ハ絶定(キルヽ)言(コトバ)ふハ續體言(ツヅクコトバ)ふきバゟア。又いろゟして續體言(ツヅクコトバ)ふる

ぞとおもひて。ロゟいひつゞけ見きバ。春ハのどけきもの夏
ハあつきもの秋ハすゞしきもの冬ハさむきものとやうゟ。
物といふ體言へ。ちのづゝらつゞきて。詞も趣意もこゝゟて
落著ちるふア。こきゟよアて續體言とふづけて。或人の連體
言といへるハとらず。
○既然言とハ。既(スデ)ふ然るといふ言ゟて。上ふる將然言ゟ對へ
さる名ふア。いさゝゝ其差別(ケヂメ)と言ハんゟ。後撰ゟ「うさら夜の
月と花とと同ドくバ心しきらん人ふ見せぜや」。古今ゟ天の
川もこぢと橋ゟ渡せぜやたふぞさつめゝ秋をしも待つ」と
ふる此二歌ともゟ。せよアぞやと受されど。前ふるハ下二段,

活言佐行の将然言よりぞと受けてそこもに願のやを添さる
なり。俗に「ミセタイモノヂヤ」と云ふ意なり。後なるは四段活言佐行の既然言よ
りぞと受けて。ここは疑のやを添たるなり。俗に「ワタスユヱ。カシテ」といふ意
なり。如此く大に差別あることなり。よく〱辨ふべし。
○諸の用言どもと。其まゝにては未語を成ざるも多かり。譬
ば四段活言にて。あらなさなどいひては何の事とも辨へ難
きを運用活言に二云受辞とそへてはあらずあらではあらどあらんは
あらましあらば。又なさずなさどなさんなさましなさばとや
うに言へば語を成て聞ゆるが如し。又其受るところにより
つりて活用く事にてはあらずはあらぬあらねど轉用きはあらん

はからめと轉用きなどする事。用言の例にたがふ事なきな
り。詞八衢にも記されたる如く受る辞もて。六種の活言を分
定むるが甚正しくて。聊も違ふ事なければ。よしなる将然言の
下には。ずでじんまじぞと志るし。續用言の下にはてつゝぬ
るたりけりきと志るし。絶定言の下にはめりらんべしらし
とらしと志るし。續體言の下にはかなまでにをよりがと志
るし。既然言の下にはいぞどと記せること。本書の例に倣へり。
何度も讀みそらんじなばえて。わが物になしえて。物したら
むには古の言をとくに得やすく。今事を記すにそといやは
ちなからむ物ぞ。

五轉名目	四段用言					一段用言					中二段用言				
	加行	佐行	多行	波行	麻行	奈行	波行	麻行	夜行	和行	加行	多行	波行	麻行	夜行
	飽	押	打	逢	任	鉤	著	似	干	見	射	居	起	落	戀	恨	老
將然言	らまはたさか ざぢんじでず					ぬいみひにき ざぢんじでず					いみひちき んじでず				
續用言	りみひちしき きけたなぬるつて					ぬいみひにき きけたなぬるつて					いみひちき たなぬるつて				
絶定言	るむふつすく ぢとらでらんす					ぬいみひにき るるるるるる ぢとらでらんす					ゆむふつく ぢでらんす				
續體言	るむふつすく がすをにまでふ					ぬいみひにき るるるるるる がすをにまでふ					むむふつく るるるるる をにまでふ				
既然言	れめへてせけ ぞど					ねいみひにき れれれれれ ぞど					むむふつく れれれれれ ぞど				

言	下二段用言										變格用言			形容詞	
	良行	阿行	加行	佐行	多行	奈行	波行	麻行	夜行	良行	加行	佐行	奈行	久活	志久活	祁久活
	下	得	受	失	捨	兼	添	求	消	枯	來	爲	太	有	善	惡	遠
將然言	りねぢ	えけぢ	えけぢ	せてぢ	へねぢ	めえぢ	れえぢ	れえぢ	めへぢ	てせぢ	こせぢ	らかぢ	ぢんじでず		く しく けく ぢ		
續用言	りねき	えけき	えけき	せてき	へねき	めえき	れえき	れえき	めへき	てせき	きしき	りにき	きけたなぬるつて		く しく けく て		
絶定言	るうと	うるうと	うるうと	うるうと	ふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	くすぬるうと	りぬすくうと	ぢらでらんす		しく しく けく と		
續體言	るうが	うるうが	うるうが	うるうが	ふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	ゆむふぬつすくう	くすぬるうが	るぬすくうが	がすをにまでふ		きしきけく らうをにまでふ		
既然言	るれれ	うるれれ	うるれれ	うるれれ	ふぬつすくれ	ゆむふぬつすくれ	ゆむふぬつすくれ	ゆむふぬつすくれ	ゆむふぬつすくれ	ゆむふぬつすくれ	くすぬるれれ	るぬすくれれ	ぞど		きしけれ ぞど		

○右の四段活言ハ。加佐多波麻良の六行ニ有て。阿奈夜和の四行ニハふし。絶定言續體言一つ詞ふるかよヲ詞ハ衢ニハこれと一つふして。受辞のミと二段ニ分たまども。此圖ニハ悉く二段ニ記し分ニヲ。下ミもこの例ふヲ。ニ既然言ニヲ有と受け活用く辞ヲ。變格活良行の下ニいふべし。詞ハ衢ニ云く。四段活言ハ第一音。かさたなまらよヲんの辞と受るふ。俗言ニいへることヲ。そハ其第一音とんの辞とと合せて。第五音こそとかもろといへヲ。もろんとゆこかざゝんを

かざそまさんとまといたんといかふどいふふヲ

○一段活言ハ。加奈波麻夜和の六行ニヲ。阿佐多良の四行ニハふし。さて將然言と續用言と一つことばふヲ。又絶定言と續體言と一つ詞ふる事圖の如し。詞ハ衢ニ。るもゞとそへてきるゝ詞ゝの絶定言ふヲ。とつゞく詞ゝの續體言ふヲ。とと兼ニるハ後の定ニヲて。古くハきにひみいねよヲきるゝ詞と受る辞と用れヲ。取意とヲ。そハ見らん見べき煮らし射鑄の活きと詞ハ衢ニハ。阿行とせらもさもど。諸書既ニ夜行ニ加へされバ。そもニ隨へヲ。

○中二段活言ハ。加多波麻夜良和の七行ニ有て。阿佐奈の三行ニハふし。さて將然言と續用言と一つことばふヲ。詞ハ衢ニ云く。中二段活の第三音ニ。るもゞとそへきるくるつるふ

るむるゆるるこうると。俗言ハ第二音ようつゝして。きるち
るひるみるいるゐるゑるゐるといへゐ。おくるとれきるとづる
とぢるぢどいへるぢ如し。取意
○下二段活言ハ。十行ともかことぐく有り將然言と續用言
と同じ言ふゐ。詞ハ衢ヨ云く「下二段」活の第三音ふ。るもじと
添ていふ。うるくるするつるぬるふるむるゆるゐるうると
俗言ハ第四音の方ヨてえるけるせるてるねるへるめるえ
るれるゑるとうつゝいへゐとうくるとうける。やするとやせ
るといふぢ如し。取意
○變格活加行ハ。詞ハ衢ヨ云くくるといふ詞のみまて此外

ふゝ。受る辞ふど圖の如し。但。ちちのみ辞と受るハ。きゝきゝ
ろと受る格ふるとろれいいと稀ふて。こゝちゝろふどこよ
ゐを受さる多し。さてすべてみ活ヨ。第五音ヨ活くことちきの
みまて外ヨ例ふゝ」。
○同活佐行ハ詞ハ衢ヨ「活きざヨ受る辞ふど圖の如し。但。ち
ちろふどみ辞と受るハ。ちよゐを受る格ふると。さハいそびせ
ゝせゝろふど。ぜよゐみ受るも外とハ異ふゐ。すべて圖ヨ
出せる辞ハ。五つヨ別きて相混雑(アヒマジハ)る事さらヨ無きと。右の如
く。ちちろみ辞のミ佗ようつもゐ。加行の變格ヨもこの辞と。
こゝみ如く用たるふどよく似さゐ。こゝふるハ第四音ヨ活

きたるとき。加行おるハ第五音ゑ活きたるゆゑ異ゑて。其外ハ全く同じ」といたれさるが如し。まさ何くもゆゑ體言（用言ゑてもその言といひすゑて體言とふしさる。）よて。此詞ゑ活らせて。何すると多くいへて。又中むろしゆ言ゑハ。えんずる孫んずるおどもいへて。但體言よてを受るハ清ゑ。用言ゆんよてを受るハ濁てていふ例おて。

○同活奈行ハ。詞八衢ゑ云く。往死（イヌシヌ）の詞二ツのゑふて。活きざまハ。大低四段ゆ活の如くゑて。切るゑとつぐくとの詞二ツゑ分ゑ。ころのむすび二つ（ハて。

○同活良行ハ。有居（アリヰ）の二つのゑふて。詞八衢ゑいたれさるが如く。四段活ゆくすつふむるハ。絶定言（キルヽコトバ）と續體言（ウヅクコトバ）とを兼たるバ（ハるとあるとも。をるとをるともといふべき格おるとハてとハてとも。をてをてともといひ。絶定言（キルヽコトバ）とハてをうといふ例おて。そゆゑろめてらんべーらーの辞ハ。續體言おるよてを受る事。大ろさ四段活ゑ同ト。○まさ四段活の既然（ステ）言。けせてへめれよて。此活ゑ受てあけらんハけてあけるハけまおせらんれせておせるおせれと既（ステ）ゑ然（シカル）有さまといふ言ハて。此故ゑ萬葉ゑハ飽有押有とやうゑ。有の字を添らまさてそゆ義おて○まさ形狀言活よて此活ゑうけてよりて（ゑ）あてのハしりて（あしくハて）引合　のハきあひ（るけりて）（るけくあて）のひきあひ（といふ言ハて。ゑきらハ云云有といふ言おると。その意急るゑ

よて。如此く其ことばのせまるゐて○まさ運用活字圖の。
ざて ずあて の引合 たて てあて の引合 たて たあて の引合 けて きてあり の引合 めて えあて
合 むて むあて の引合 せて してあて の引合 むどゑむ此てさらきま属け
るものむて。この故ま。有のこゝろと含める事。運用活字圖ま
さ結辞の下ふもいへて。併せ考ふべし。
○形狀言ハ圖のごとく久活志久活祁久活ともま受る辞の
例。上ふる五種活とハ異むて。さて此活の轉聲とたぶきて。よ
ごとにしざまむど下へつゞくるにて。まさま月清き山祁高きむどげよ
げをしふどむどうくるにて。いひすゑて體言とせるハ。絶定言む
るべくおもいるゝむて。

自佗活言

上ふる四種活言の進退作用ふるふつけて。そまふうハて。
自然すると佗よて然せらるゝとの分別にて。詞通路小歌よ
むふも。文かくふも事と記ひふも。萬事と分ち其狀と委しく
知らするふきバ。專この自佗の詞の活用と。最と心得べきま
ざむて。其ハおのづらは定格にて。此方の事と云ふよハ。
此方小用ふべき言と用ひ彼方ハ事とかさるふハ。彼方ま用
ふべき語と用ひざきバ。其事委しく分きバ。自佗混雜して言
語成ハぞ。其さま聞え難けきバ。等閑ま思ひ過さバ。よく辨へ
置べき事むて抑此活用ハ千萬の事と。委しく言ひ分つわざ

ゐきバ。其活用さまも種〻多うるゝ。世の人自佗のことゞい
たゞ。烟ゐどのたつといふいものづうらたつ事ゝいひたつ
るといふい人ゝたつる事ゝいひ。重亂いそくうやうの自佗ハ合離の義ゝつきてう
はることゝて四段活と下二段活とのうへゝのゝ有ゝて佗
の活言ゝあづうらぬ事ゐきバ別ゐゝ。下ゝくゝ〻〻く辨へお
けゝ。花のちるといふいものづうらちる事。ちらけといふい風
ゐどのちらけ此ハ四段活言ゝまゝ四段活佐行の添ゝる例ゐゝ事とのゝ思ひて。委
しく考へ知るべき事とも思たらず。又この事ゝ論へる書も
無けきバ。おのづうら心ゝ附る輩も無くゐものも歌よゝものゝ
よく心得ゝゝと思ふ人も。取ゝづ〻ていい誤る事ゐきゐ非び。
況て初學ゝ輩ハ甚たゝ〻〻〻くて。常ニ誤る事多けきバ。其

定格ゝ教へ諭ゝ。ゝうゝて。自佗の詞ゝ六段ゝ次第て一目ゝ
見度〻心得易うらゝめん爲ゝ。圖ゐ出〻て懇到ゝさゝされ
ゝゝ。そけゝたまゐふゐかよゝて。重亂此書ゝ著述ゝつけて。
今ゝゝ捷徑ゝ見得つるゐよゝて。一目ゝ見度〻心得易うら
〻めん爲ゝ。圖ゝうらハ〻て其定格ゝ教へさゝすものゐゝ。
さてうけ自佗ゝゝうつ辞ハ。佐行良行相雙對て受る事ゝて。
各上ゐる用言のかさゐきるものゝて。別ゝ一種の活言ゐあ
らび。この故ゝその受るゝゝろよゝて。五轉する事すこ〻も用
言けゝ例ゝたゞそび。但合離けゝことバの自佗ハ此例ゝうらざ
きバ。下ゝ一圖ゝうらハ〻て別ゝ物せゝ。

四段自佗活言	一段自佗活言	中二段自佗
鉤住逢打押飽	居射見干似着	老恨戀落起
らまはたさう	ねいみひにき	いみひちき
れ せ さ	ら さ も せ	ら さ も せ
れ せ し	ら さ れ させ	ら さ ち せ
る す す	ら る さす	ら る さす
れ する る〜	ら〜 さする	ら〜 さする
れ すれ る れ	ら る れ さすれ	ら る れ さすれ

活言	下二段自佗活言												變格自佗活言		
下率	得	受	失	捨	兼	添	求	消	枯	植	來	爲	往	有
り	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	え	こ	せ	ら	か
					ら						さ せ	さ せ	さ せ	れ
					ら						さ せ	さ せ	さ せ	れ
					さす						さす	す さす	す す	る
					さする						さする	す さする	す する	る〜
					さすれ						さすれ	せ さすれ	せ そ	る

右は四段活佐行ようつゞて。さゝすせと活用辞ハ。こゞうら物と然するゝゞ。故爲の字は義ゝゞ。又人はうへとうやまふ辞ともゝるなり。○下二段活佐行ふうつゞてせすもるすきもゝるゝゝるゝの對ゝて。四段活ゝさ變格活。奈行良行よゞ受く。させさすさするさすれらるゝらるゝらるゝの對ゝて。一段活中二段活下二段活ゝさ變格活加行佐行よゞ受く。と活用く辞ハ。佗ゝして然せさする辞ゝゞ。故ゝ令れ字の義ゝゞ。ゝさ尊き人のゝらしれゝふゝ敬ひていふ辞ともゝるなゞ。○下二段活良行ふうつゞて。ゝるゝゝるゝゝるゝの對ゝて。四段活ゝさ變格活奈行良行よゞ受く。らゝらるらるゝらるゝらるゝの對ゝて。一段活中二段活又變格活加行佐行よゞうくゝると活用く辞ハ。佗ゝゞ然せらるゝの辞ゝゞ。故ゝ被の字は義ゝゞ。

○四段活の將然言ゝゞ。同活佐行ふうつゞて。ゝらさんあらゝうすあらせといへバ。こゞうら物と然するゝゞ。下二段活佐行ふうつゞて。あらせゝらすゝらするあらすれといへバ。佗ゝして然せさする辞とゝゞ。ゝゝ下二段活良行ようつゞて。あらゝゝるゝらるゝらるゝといへバ。佗ゝゞ然せらるゝ辞とゝるなり。さて此四段活ゝ限ゞて。合離の義ゝつさて下二段活と。たゞひゝ入交ゞて自佗の分るゝことバゝんゝる。野之口翁の説ゝ。離ゝてゝる物と合する詞ハ。四段活天然とゝゞ。則佗ゝゞ然する下二段活人爲とゝるなり。則自然するゝゞ。

そもゝ反〳〵て。合ひて有る物と離(ケ)れ詞ハ。四段活人爲とふを。下二段活天然とふるなりといへれさを。こゝふよを。て一目ふ見度(クタ)〳〵心得やすからしめんが爲ゝ。さらゝ圖ふもけする事左のごとし。

離		合	
自	他	自	他
裂(サ)		附(ツ)	
か	け	か	け
き	け	き	け
く	く	く	く
く	く	くる	く
くる	く	くれ	け
くゝ	け		

かくゝのごとく相(ヒ)反〳〵て用をふる事少〳〵もたがふことなし。余ハ此例ゝふぞ〳〵へ知るべし。

○一段活。中二段活。下二段活ふど。圖のごとく將然言ゝを下二段活佐行ゝうつ〳〵て。きさせきさすきさするきさすれとやらゝまいへば。他(ヒト)として然せさする辞ふを。また下二段活良行ゝうつ〳〵て。きらきらるきらるゝきらるれとやらゝまいへば。他(ヒト)ゝを然せらるゝ辞とふるなり。

○變格活加行ハ。將然言ふるこゝを。下二段活佐行ゝうつせば。他(ヒト)として然せさするふを。下二段活良行ゝうつせば。人ゝを然せらるゝ辞とふること。上の例ゝ同じ。

○同活佐行ハ。將然言ふるせゝを。四段活佐行ゝうつ〳〵てせさんせ〳〵せすせゝといへば。ゝづから物として〳〵するふを。

まゝ下二段活佐行ようつせば。佗（ト）として然せさする辞なり。
まゝ下二段活良行ようつせば。佗よりしらせらるゝ辞とも
るなり。さてもろ〳〵の體言より。せさすせらるとうくる事
多きものなり。こゝ體言をせよりうけて。うをようさすらるの
辞のそひて。活用けるゝて悉く此屬なりと知るべし。
○同活奈行良行より四段活佐行ようつせばゝづから物と
しらする辞なり。また下二段活佐行ふうつして。いなす（いらす）といい
へば佗として然せさするふなり。下二段活良行ようつして
いるる（あらる）といへば。佗より然せらるゝ辞となるなり。思ひまぎ
ふることなられ

運用活字

諸（モロ〳〵）の用言（ヨウゲン）より受（ウク）る辞（ジヨウ）を。運用活字と号（ナヅ）けとり。然（サ）るゝ上なる
用言のまゝにていゝ言（イヒ）さしふなりて。未語（ダ）を成（ナ）さゞるも有る
と。こゝに擧（ア）たる辞（ジヨウ）どもに移（ウツ）しとくれば。悉（ツヒ）く其用ととゝの
ふるものなきばなり。詞八衢より。受る辞を圖などふも出（ダ）して。
煩（ハンラ）はしきまで言（イ）へると。無益の事と思ふ人もいるべけまど。
受る辞ハ圖の如く横に通りて。少（ス）も違（タガ）ふことなく。いと正しく。
まゝ四種の用言を別（ワカ）ち知らんに。この受る辞もて定むるゞ
肝要なきばよく辨（ワキマ）へ知らしめんゞ爲なり。といるによりて。
用言のところに將然言ゆゝ。ずでゞんましぞ。續用言ゆゝて。

つゝぬるたまけまき絶定言まい。めまらんべ〜らしとかし。續體言まい。かふまでにとよまが既然言まい。ぞどと其下まを受る辞の大抵の定格を擧たまど其ハ五轉の位を定むる目標ぞうまるものせるまて。委〜くする時ハ。おほにはまゝ有てその受る辞まゝ五轉〜て。上ふる用言まを屬るにまうつまを活用うぬ有まこをふよまを一段づゝ圖ふものして其用法を知らしむ。さて竪まを五段まをわうちゑるしたるハ受て用く辞どもふま。頭まを不或ハ將とうけるハ。假まにつべき正字を考へまるせるふま。圏中ふるハ無活用辞どもふま。用言まゝ結辞ゑ條まをハいせ見て。よ〜〜思ひ辨ふべくふむ。

將然言運用活字圖

得	起	著	飽	將然言運用活字圖
辞用	活用	無	不有	令	將爲	將	不
ふく	ふん	で	ざら	〜め	ませ	○	ず
ちくま	で	ざま	〜め	まく	ん	ず
	じ	ざま	〜む	まー	ん	ず
	ず	ざる	〜むる	まー	ん	ぬ
	ざや	ざれ	〜むも	まーろ	め	めゝ

右の不行ふる。ずぬ祢ハ。爲もゞ対反對ふま○將行のんめハ。いゆひ抄ふいゝゞ然有らぬ事をとろま。ぢらまーていふ辞ふ匡といま。○將爲行のゝ。ませまくまーまーろハ。將行の一種

かア。詞玉緒ふ「おかよそましハ。んを延たる如く聞えて。大ろ
さんといふと同意かアとなア。○令行の志めしむ志むるし。
むきハ。下二段活麻行の屬かア。○不有行の。ざらざアざるざ
きハずなアのひきなひかア。○ちんハ。なもひ抄ふ「そとなつ
らふることばかア」となア。そハも徒の係辞のミまてむす
ぶ例ふる事。詞玉緒ふ委し。○でハ不の轉用かア詞玉緒ふす
しての約まきるなア」となア。○しも同ドく不の轉用かア詞
玉緒ふ。ずのいまゞ然らぬとろ称ていふ辞かア」となア。○ば
いものゝかアゆきを称ゞふ意かア。用言の下ふくいしくい
へア。○むやハ上ふるばふ。願のやハろハきるかア。○ちくち

くふハ。形狀言久活ふて。無もゞみ意かア。

續用言運用活																		
飽キ					著キ			起オキ										
竟	去	而有	來有	既	竟既	往既	將竟	將往	將既	て	に	た	け	○	○	○	ん	ん	ん
て	ぬ	たら	けら	け	てけ	ふけ	○	○	○	つ	ぬ	た	け	き	てき	ふき	てん	ちん	けん
つる	ぬる	たる	ける	し	てし	にし	てん	ちん	けん	つも	ぬも	たも	けれ	しろ	てしろ	にしろ	てめ	ちめ	けめ

字圖

得エ

無活用辞				
つ	ず	げ	も	
祢	ずて	あふ	ぐう	
けら	てせ	ーぐ	や	
ちば	だよ	よ	か	
ちぐ	のも	え	こう	

右の竟行のてつつるつまい。下二段活多行の屬ふて。○去行のふにぬぬるぬまい。變格活奈行の屬よて。所謂畢ぬのぬよて。將然言よてうくる。不行のぬといい異ふて。○而有行のたらたてたるたまいてありの引合ひて。變格活良行の屬也○來有行のけらけてけるけまいさていての引合ひて。變格活良行屬ふて。○既行のけまーしふ。所謂過去のーふて。さてこくの目標ヨ。既もじと借用ひさるい。或人の說ふよまてくハしくハ結辞の下ヨいふべし。○竟既行のてけてきてーてーうハ。下二段活多行の續用言よて。過去のーふつぐれさるゞ。一つは用言は如くふまるなう。○往既行のけけふさけーふーうハ。變格活奈行の續用言よて。過去のーふつぐれるゞ。一つは用言の如くふまるふて。○將竟行のてんてめい。下二段活多行の將然言よて。んめとうけ活用ける辞ふて。○將往行のふんふめい變格活奈行の將然言よて。んめとうけてさらける辞ふて。○將既行のけんけめい上ふる。既行の將然言よてんめと受け活用ける辞ふて。○つゝぬ語の間ヨいるい。

てふ通ひ句は終(トヂメ)にいるはいひさゝて言外の意をもゝむ
る辞ふを。○係はは。變格活奈行の屬(ま)て。令(ま)する辞ふを。○けら
しはは。絶定言よをうくるらしとは別まて變格活良行の將然
言よを。しとつゞける辞ふるゞ來有行のけらよをかさふを
るふを。○ふぞは變格活奈行の將然言を。ぞまて受てふをも
きとそろを係ゞふ辞ふを。○ふゞらはいゆひ抄まの本よをの
隨(マヽ)ましふきて。取直し撰(エラ)びすてふどもせぬ辞ふをといふを。○
がては難(ガテ)まて形狀言久活れたぐひふを。○がてらは物いふを
てその傍(ちかく)ふ事とかぬる辞ふを。○こせはこ爲(コヒ)ふを萬葉まの夢
まの見えころ。ちをこすふゆめ。いをこせぬろもふどいるこれ

ふを。ともふを願ふ意ともふるなり。○むまは。いゆひ抄まの其一
つといひきらめて。殘をと思せたる辞ふを。といふを。○の
まは。ろは物事を一條(ヒトスヂ)まはてこいふ辞ふを。○げはいゆひ抄
まの表はさまと見て心と量をいふ辞ふを。○いふは歌
まは。何いへずとよめを。いゆひ抄まの。ひまはさらんとす
る物のいまざえしはてぬうちふといふ意ふを。といへを。○
しぶは。てしぶ　てしぶる　ふしぶ　ふしぶる　るどおるゞく願(ネガ)ひとふる辞ふを。○
には。係辞ふを。徒(ま)屬(ま)に。變格活奈行の續用言まて。ふまぬぬるぬ
ぬとそさらきて。續體言よを受るにとは別ふを。この故まて
と相雙(アヒナラ)びて活用(ハタラキ)とふすこと。てんふん相ふらびてきにき相

雙ぶぐごとし。○ともぐやろ属にころは六つハ係辞ふを。

絶定言運用活字圖

飽	著	起	得				
也	見有	將有	可	不可	無	活	用	辞
ふら	めら	○	べく	まじく	らし	べし	かし	ふ
ふを	めを	らん	べく	まじく	と	べら	ふ	も
ふを	めを	らん	べし	まじ	ども	ぶ祢	そさ	
ふる	める	らん	べき	まじき	とて	ぶよ	や	
ふき	めき	らめ	べらき	まじれ	てふ	ぶろう	よ	

右の也行のふらふをるるふきハ。變格活良行の屬るをいハゆひ抄よ末るをといへるこれるを。漢文よ也よさ矣字をかけるてぐひよて。續體言よを受る小ハをの引合のるをとハ異ふを。○見有行のめらめをめるめきハ。をえハをれ引合よて。變格活良行の屬ふを。○將有行のらんらめハ變格活良行の將然言よをんめと受けたらける辞ふを。○可行のべくべしべきべけきハ。形狀言久活の屬ふを。○不可行のまじくまじまじきまじけきハ。可行の反對よて。形狀言志久活の屬ふを。○らしハ結辞の下よハへを。○といハ詞玉緒よ。すべて絶定ことバと續くる辞ふを」とハり。ともとてふ（といふの引合）てハへハの

引合ふと此屬ふて。○べべらい可行の轉用まて。べ〜といふまと大らと同じ。○が孫ぐまい詞玉緒まに中昔の言まささぎぐ孫むこぐ孫ふどい〜ると。同じくて。か孫て其きうふ儲けて待つ意ふて」といて○ぢうて。いらひ抄まに數有る物。ふぐき物まに分際と立て。たぐこきはどこもとぐけふどいふ辞ふて」といて。○かしい。いらひ抄まに。ふとまてまにまろせさる事をいひて。人まに思ゑせさる辞ふて。といて。○ふい禁止辞の下まくいしくい〜て。○ゑさい。事といひてまさうれうへまに。いらんとする事とさしていふ辞ふて。○やまに二種いて。その一つい問ひうくるやふて。いらややふどまて。續體言まにいらるうふきうと。受くと。同意ふて。さて此やかも同じきうとおもへば。受るところふ大ふ差異いる事まて。やハ絶定言まて受け。かい續體言まて受るぐ定まてふり。續用言續體言まにやハ疑のやまてこれ二種といい異ふて思ひ混ふることふうき其一つい歎息のやまてこと。て。やかひふしやふどいふ此るて。口まに言試て。問うくる方れやい。ふぐらくその詞て。續體言まうつしふくて。ふかと受てその意とさぐむべく歎息の方れやいことまてまかひふしまとまと通しうけて。それ味と知るべくふむ○まも歎息れ辞まて。大む孫やまに同じ○ふい歎辞ふてつらしふうふしふのふるていもい抄まに。「人まいひうくる詞ふぐら。思ひいまて

いひとて言ふもいふ』とはて○もい歎辞ふてうもしもう
しものもまて。大うさふる同じ。はゆひ抄ま。すべてやふもの
三つ心かよふこと多し。古集ま通ひて異本まふもる歌はま
こはてといへて。ふは助辞の下まいふとはいせ見るべし。

續體言運用活字					
起（オル）	著（キル）	飽（アク）			
辞	用	活	無		在
も	から	ぞう	を	か	ら
も	ま	だま	ろう	かも	ふて
ど	ふから	さへ	が	かも	なて
ん	ふし	すら	が祢	まで	ふる
や	のミ	ごと	がに	に	ふき

圖得（ウル）

か	こそ			

右の在行の。からなてふるなきいふはて引合ま。て。變格活
良行の屬ふて。○かハ。語のとぢめまおくかなてやま通ふか
續體言よて受けて係辞とふる。とい異ふて。さて此語の終ふおくかま二種
はて。其一つはとひろくる意ま。はるるふさらふどいへる
かまて。絶定言よて。はてやふしやといふと同意ふて。其一つ
はかふは意ふ通ひて歎息辞とふきるふて。其物其事ふよて
て唱へ試えきび。その意味ふのづらふらるしものふて。詞玉
緒ま證例ではまま挙らきさ
きと。此二例まハ過ざるふて。○かふい。上ふる歎息ふ方はか
まもしふは重てはひて。一つは結辞とふきるふて。○かもふ

るくハかもの意ゑ用(ヅカ)へきど。萬葉集ところまでハかもといふ辞ゐアて。かもといいそざアゝもアゝ。後ゑハ疑ひ方の辞とおもアゝ。この故ゑゐもひ抄ゑ。目ゑも心ゆも餘まる事とまづかとうさゞひて。やゞてもと詠(ナガ)む辞とそへたるもアゝ。といへアゝまでハゐもひ抄ゑ。その處まで行き至る心といふもアゝとゐアゝにハ。續用言よアゝ受てもにぬぬるぬをと活くといふ異もアゝゐもひ抄ゑ。さすところみ中ゑものとやアすゑていふ辞もアゝとゐるゐをもアゝ。○そハ此係辞の下ゑいへアゝ。○よアゝハゐもひ抄ゑ。物と定めおきて。ゐをよアゝ出ていふ辞もアゝとゐアゝ。○がハのゆ通ふ辞もアゝゐもひ抄ゑ。詞とのべていひのといひ。詞の勢きハまる時ゑハがといふ」といへアゝ。○が祢がにハ。絶定言の條ゑいへアゝ。○でもアゝともおれゝ條ゑいへアゝ。○だゆハ續用言の條ゑいへアゝ○さへいはもひ抄ゑ。一つゑ事ゆ二つも三つもゐひたるをいふ辞ゑアゝとゐアゝ。○すらハだゆ同ど。○でとハ。毎くゑ字のこゝろもアゝ。○からハ。外を待さびして。其物事ゑ上ゑゐるといふ辞もアゝ。○ゆがらハ續用言の下ゑいへアゝ。○ゆらしハ。にあらしの引合もアゝ委しくハ結辞の下ゑいへアゝ○のゑハ。續用言の條ゑいへアゝ。○もハ。ぞもかんハ。ぞとハふと同さゝよまぬ事ゑて。多くハ此もかんハ。ぞとハふと同ドさものゆら。歌ゑハを此辞をつゐへバ。詞つまアて調ゐしく。文章ゑ用ふきバ。詞ゆざらゐふもアて。こよゆけきバるアゝ。續紀の宣命ゑハ那母とハへアゝ。ふるくハもかんといいそざアけらしゐもひ抄ゑ。言ゆ

べき事を押出して。慥なことをとる時は。句の中に有る辞ふを「とあるやかこそ」此七つは上のにと「此二つハ徒に属れ。ちどこふ係辞ふを。

既然言運用活字圖

飽著起得無活用辞

ば

ぞや

ど

ども

や

右のぞい。既に然有ることを受けていふ辞にて。將然言よりて受るば」といふ。大に意味はかゝる事すてに云へを。○ぞやハ上ちるぞに疑はやれるいもるふを。○どども」の二ツハ。雖の義ふを。詞玉緒に此雖の字は意の言に清と濁との差別にを。既に然る事といふにいどども濁を。未然らざる事とにらに」いふにハ。ととも清ていふ。此清濁ふよりて。上の受る言の格も異ふを」とにを。○やハ此辞に二義にを。其一つハ疑はやふをこれによりて語は半ふにりて。結辞もその掟をたがへざる事ふを。其一つハ歎息はやふを。こをふよりて。語の終めか有りて。趣意その辞にて落著する事にて。にきやハにを」よふきやいもをよと。心に味へ知らるしかどの意味ハ。ものづから知らるしもはふを。まに語の終にるも。疑はやの結辞といひのこしたるにを。そハ此例にならびよく〳〵思ひにくべくふん。

指揮辞運用活字圖

何よ 何ね	けれ ちゃれ	うれ まれ	れめへてせけ	

無活用辞

			と	か〜
			とも	や
			とて	
			てふ	
			てへ	

此ハ四段活まと變格活奈行良行ともと既然言すかいち指揮とかると本まして。一段活中二段活下二段活まと變格活加行佐行の將然言よて。よまゝ孫と受て指揮とかる辞よて。うけさる辞どもかて。○とともとてふ といふ といへ の引合 てへ の引合 かゝかど。既と絶定言の條まいへて。○やい。あやい抄よ。何よとよめるゝ似て。心いさゝう打ふるまへるやうまよめり」と

體言運用活字圖

言

爲	膏	著	無活用辞		
せ	せら	たら	と	の	さへ
〜	せて	たて	とも	へ	すら
す	せて	たて	とふ	よ	のみ
する	せる	たる	てふ	や	より
すれ	せき	たき	てへ	ら	から

此ハ諸ゝ體言よて。受る辞の大らさかて。中段と言といふ字と書さるハ。そこと入て孰の言をも置べき為。假と志らせるかて○爲行の。せ〜すするすきへ諸の字どもよて。解い釋すかと變

格活佐行ふうけ活用(ハタラ)くもあり。○爲有行の。せらせあせるせも
ハ諸の體言よりも紅葉せり冬ごもりもどる受け活用く。てはりれ引合
まて變格活良行の屬あり。○止有行の。たらたりたるたきハ
とはりれ引合まて。漢文ハ君臣くたらずとも變格活良行の屬
あり。○とともハ。絶定言の下まいへり。○とふハ。といふの引
合あり。○てふてハ。絶定言條まいへり。○のハ連辭(ツラネコトバ)あり。○
へハ係辭の徒の下まくさ〳〵いへり。○よやハ。呼びかけて。
はつらふるこゝろあり。○らハ。等もどのこゝろまて等(ヒト)〳〵く
並ぶものまに有るかいふ辭あり。○さへもらまからハ。續體
言の條まいへり。○のゝハ續用言の條まいへり。